

皆の広場

■R7素人の歴史考⑭「敦賀の古代史」 自文科 永野 徹

(1) 敦賀の古代概要

1) はじめに

敦賀と言えば、正一位の気比神宮、景勝の松原海岸、越前ガニ・・・色々と有ります。古代大和朝廷の飛鳥文化については、百済の影響よりも多分に高句麗の影響が見られる。百済文化は主として九州筑紫から瀬戸内海経由で伝来しており、一方新羅・高句麗の文化は日本海地方経由で大和へ伝来した。

古代においては日本海側は中国、韓国、東南アジア、シベリアからの政治・経済・文化交流の窓口であり今で言う表日本であった。その主要な窓口の一つが敦賀であると言われる。

敦賀を中心とする地域には4～5世紀頃の定型的な前方後円墳がなく、唯一この地域で最大の向出山一号古墳があり、金銅装武具が副葬されていた。

敦賀郡と言う名称が初めて見えるのは天平3年越前国正税帳(大日本古文書)であり。敦賀津の名前は奈良時代末から平安時代中期以降の諸資料に出てくる。敦賀は「ツガアラシ」渡来伝承(日本書紀:垂仁2年)により「角鹿(ツガ)≡敦賀」と呼ばれ、日本書紀では渡来した津を筍飯浦(ケイウ)＝気比浦と記載されている。崇神天皇の世に額に角のある人が船に乗って、越国の筍飯浦(ケイウ)に渡来した古代文献記録に現れる主な敦賀関連記事を列記すると以下のとおり。

- ・垂仁天皇2年(BC28) ツガアラシの渡来
- ・仲哀天皇(193) 角鹿行幸記事
- ・応神天皇(270) 角鹿行幸記事、気比大神との易名交換記事
- ・武烈天皇(600) 角鹿の塩を大和朝廷に献上

敦賀と大和朝廷の関わりは明確ではなく6世紀後半以降となります。

大和朝廷は蘇我氏の時代(6世紀末)になってようやく北陸と関係を持ちはじめた。背景としては対立する新羅との近攻政策上、比較的交流のある日本海側の諸国を通じて高句麗・渤海から情報入手と浸入防止対策を講じる必要があったため。敦賀では大宝律令(701)により評が郡に変わり、角鹿の国～角鹿評～敦賀郡と名称が変遷し奈良時代半ばに「敦賀」が誕生した。

8世紀～9世紀頃には外交上、軍事上で敦賀津は最も重要な官港となり、766年以降、越前・越後・越中・能登・若狭等北陸全ての税は敦賀津経由となった。804年敦賀松原客院が設置(国兵部省+越前国司+敦賀郡司・津守の三体制管理)されて以降、渤海との文化交流遺産として漢詩酬唱文学、宣明歴などがある。

2) 敦賀の地名由来

敦賀は古代に角鹿(ツガ)と呼ばれた。この地名由来の一つが「ツガアラシ」(角鹿阿羅斯等)の渡来伝承である。ツガアラシは大加羅国(オオカラコク)の大伽耶(オオヤ)から渡来した金海加羅(キンカイラ)の王子である。ツガに関して「額に角のある人」(日本書紀垂仁記)と記された由縁は角状の冠説、新羅の角杯説、或いはツガ(角鹿)と言う人名からとの諸説がある。ツガアラシの痕跡としては気比神宮東方の境内摂社になっている式内社角鹿神社の祭神はツガアラシである。笙の川流域にはツガアラシの後裔の名前の地名がある。例えば市の橋(大市首氏)、清水(清水首氏)、疋田(辟田首氏)など。(新撰姓氏録)(垂仁記によると)

- 1) 崇神天皇の世に、額に角のある人が船に乗って筍飯浦(ケイウ)に渡来した。
- 2) この人は、意富加羅国(オホカラコク)の王子で名は「都怒我阿羅斯等(ツガアラシ)」亦の名「于斯岐阿利叱智干岐(ウシキアリシカンキ)」と言い穴門～出雲を経て至る。
- 3) この年崇神天皇が崩御され、垂仁天皇に仕えて3年目を迎えて、
- 4) 垂仁天皇はツガアラシに「汝の国に帰りたいか」と訪ねたら「そう願っている」と答えたので「汝の本国の名を先の崇神天皇の名を取って御間城(ミマキ)＝任那と改名するように告げられ本国に帰った。彼の本国を任那国(ミナ)と呼ぶとある。

3) 気比神社

気比神社はもともと食物の神様で地主神であった。

延喜式では敦賀郡には式内社43座とされ、氣比神社と摂社とからなる天つ系神社で7座と摂社である天利劍・天比女若御子・天伊佐彦他に常宮の天八百万比咩の末社である天国津彦・天国津比売・天鈴・玉佐々良彦各社がまた地名を引く神社としては劍神社(横浜)・阿蘇村利棕神社・五幡神社・田結神社・金前神社(金ヶ崎)・角鹿神社(氣比摂社)・白城神社(白木)・三前神社(立石)・久豆弥神社(香見)・等が祭祀されている

敦賀郡司の関係する神社は氣比神社・角鹿神社・天国津彦・比売神社など。

北陸では式内社ではないが渡来系の漢神(韓神)信仰が根強かったのが特色。氣比神社の驚異的な格式の昇格は次のような経緯があり目を見晴るものがある。

731(従3位の神階)藤原武智麻呂が比叡山で夢を見て氣比神宮寺を起創した。

770(奉幣) 恵美押勝の乱平定後奉幣があった。

771(劍神叙勲) 新羅との外交政策上で北辺警備の強化で従4位叙勲

809(解由状) 氣比神宮の宮司交代には解由状を必要とした・

835(正3位) 氣比神宮の祝・祢宜の神官に把笏が認められた。

その後氣比神社は、9世紀に全国一位の正一位を授かる。

古事記「仲哀段」に神宮皇后が朝鮮出兵の後、筑紫で生んだ太子(応神天皇)とヤマトへ帰る時に香坂王(カサカウ)、忍熊王(オシクマウ)と抗争して穢れた為、竹内宿禰は太子(品陀和氣命ホシタケ)をつれて禊のため近江～若狭を経て角鹿に入りその地の伊著沙和氣(イザサワケ)大神と名前を交換して、易名の幣に入鹿魚を献上したお礼に、イザサワケ大神の名を讀んで御食津(ミケツ)=氣比大神と名づけた。

但し、神宮皇后、応神天皇も架空の人物との説もあり由縁は史実とは言いがたい。また易名の幣とされた入鹿魚(イルカ)が大漁に鼻に傷を負い血だらけで浜に打ち寄せた様からこの浜辺を血浦(氣比浦)と呼んだとの記載もある。

筭飯浦(ケイウ)にいた氣比神についてのヤマト朝廷の最初の記載は692年に越前国司が角鹿郡の浜で捕まえた白蛾(シラキル)鳥を献上したので、朝廷は筭飯神に封戸20戸を加増したとあるのが最初である。(日本書紀持等天皇記)

(2) 大和朝廷と敦賀

記紀には「角鹿国造」と言う文字は全くないが、古事記の完成前に「角鹿海直(ツマガノアマノタイ)」が居たことが孝靈記に記載されている。直(あがた)は国造に与えられる姓であるので「角鹿海直」は国造りクラスの現地酋長が6世紀頃にいたと見れる。角鹿海直は漁業をはじめ海上交通の仕事をした海部の統率者と推定される。敦賀地域の首長が大和朝廷の国造りとなることで、トネリ・ウネメ等の人的貢献と納税が必要となってきた。

やがて海部として、海産物(塩・海草・雑魚・カニ等)の調備を強いられるようになる。

敦賀の塩が大和朝廷の用塩となっていた(武烈天皇記)、また敦賀の蟹(応神天皇段)も納められていた等の記載がある。

港も、律令制下で敦賀津は地域の要港から国家の要港へと変化していった。

能登、越から東方を含めて日本海航路の拠点として敦賀津が重要になった。

越前国角鹿評が701年大宝令の施行により越前国角鹿郡となった。

この角鹿郡が713年の「機内7道の諸国郡郷の名は好字をつけよ」により敦賀郡と改名されて「角鹿」から「敦賀」への用字変更最初の記事は天平3年の越前国正税帳である。律令制の北陸への浸透は713年越前国正税帳により理解される。

1) 愛発関(あらちせき)

(関所・駅)

敦賀津の発展と共に敦賀から塩津の道が重視されるようになった。

古代敦賀郡には松原駅・鹿蒜駅の2駅があつて塩津道とは別ルートに駅があつた。駅は兵部省兵馬司の所管で、敦賀は京から見れば北陸道の入口にあたり重要な地点であつたので愛発関(あらち)がおかれた。

愛発関は東海道への鈴鹿関、東山道への美濃不破関と共に三関と呼ばれた。

愛発関は越前国司の所管下に置かれた。708年には史生が追加された。

関司は国司の目以上の者と決められ、愛発関でも監関は掾が担当した。

愛発関の緊張した役割例

・721年元正天皇死去、・729年長屋王の変、・756年桓武天皇死去ときなど

・中でも764年恵美押勝の乱では愛発関は渦中に置かれた。

最初は太政大臣の恵美押勝から固関と軍兵の徴発指令があり、その後
反対に孝謙天皇から恵美押勝を反逆者として取締る令が出て衛門少尉佐伯
伊多智が直接乗り込んできて警戒態勢を整え逃亡を阻止した。
敦賀直嶋麻呂も手兵を連れ支援し、その功勞で後日・称徳天皇より外従5位下
の昇進を受けた。

愛発関の場所については未だ確定されていないが現在の足田周辺が有力
その後;

780年 蝦夷の大反乱があり改めて北陸地方の軍事体制を強化検討。

782年 氷上川継の反乱のとき固関した。

789年 長岡京(桓武天皇)新政府から蝦夷征伐上で愛発関の停廃命令が出た。

806年 桓武天皇の死没の際にも旧関として固関され、その後愛発関は消えた

2) 敦賀港

1. 敦賀津

日本海海上交通ルートは「北の海つ道」と呼ばれ対馬海流による敦賀西部との
航路とリマン海流による北方からの東部ルートが早くから開けていた。

・ツガアラシ敦賀へ渡来(加羅国出発～穴門～出雲～角鹿津に定着)

・敦賀から神宮皇后による熊襲征伐航路(角鹿～淳田門～穴門～豊浦)

蘇我氏の時代になり、敦賀津の役割は日本海の海上交通拠点に東方の要港とし
て重要視される様になってきた。

若狭から越前への陸路と別に敦賀津が越への官人赴任の経路となってきた。

越前比楽湊、能登加嶋津、越中日理湊、越後蒲原津、佐渡国津等の北陸諸国
の各種荷物が全て敦賀津に回送されて、陸路で琵琶湖の近江塩津まで車馬で
駄送され、北陸諸国と都を結ぶ官人・物資輸送の拠点となっていた。

敦賀津は郡司・津守によって直接管理されていたが、造船は国司が管理し、
船舶の管理は兵部省の主船司・検船使が直接あった。

2. 渤海使

渤海との遠交、新羅との近攻政策で渤海使は727年～926年まで35回に及んだ。

・727年最初の渤海使が出羽国に漂着(24名)。

・「鳥孝慎」は841年判官で、849年副使として来所。

・859年能登国珠洲に使節長官「鳥孝慎」以下104名大挙してくる・

・861年鳥孝慎らが献上した宣明暦が頒行された。

・882加賀国に来所、漢文のできる渤海客使として越前国衛から島田が対応

3. 松原客院

渤海使は相次いで日本海沿岸へ来着した。

(773年)渤海使は筑紫に寄港するように日本海沿岸入港を禁止したがその後も
773年(能登国)・776敦賀郡・779と786出羽国と続いたので804年渤海使を丁重
にもてなす為に客院を造る様に能登国に勅があり敦賀客院も造営された。

759年藤原仲麻呂は新羅征伐について渤海と情報交換して計画を立案

804年敦賀松原客院の設置(国兵部省+越前国司+敦賀郡司・津守の三体制管理)

この当時の文化遺産は渤海使との漢詩酬唱文学、江戸時代まで使用された宣明歴

815年 越前国で蕃客対応のため大船の徴発が命令された。

恵美押勝の乱(765)以降、愛発関の強化の他に、松原倉が対外事情も踏まえて
強化され、5万石保管されたと言う。松原官倉群の管理は敦賀津の管轄であろう。

この政策は757年頃からの藤原仲麻呂等主導の日本海側警備の強化の一環で
対新羅・渤海にたいして遠交・近攻政策で望もうとしたものである。

(おわり)